

震災詠論 —時間の経過に着目して—

鈴木敦也

2021年3月、東日本大震災発生から10年が経過する。この間多くの人々が東日本大震災を題材に短歌を詠んできた。しかしこれらの震災詠について、全国のアマチュアの人々が詠んだ歌の研究はあまり進んでいない。特に時間軸を主とした研究はほとんど行われていない。そこで本研究では日本全国の有名歌人ではない人々が詠んだ震災詠について収集・整理を行い、時間軸を中心に分析をして傾向や変化を明らかにする

研究方法は、新聞全国紙3紙の一般購読者からの投稿欄の短歌を収集対象に設定し、その中でも特に2011年以降各年の3月に掲載された震災詠の収集・整理・分析とした。

今回の分析では次の5つの点が明らかになった。1点目に、この10年間で3紙の一般購読者からの投稿欄に掲載された震災詠の合計数が221首であることがわかった。また全短歌数に対する震災詠の割合は約4.3%であり、新聞別では「10年間で掲載された震災詠数」と「掲載された全短歌数に対する震災詠の割合」の両方で『朝日新聞』が1番多いことも分かった。2点目にわかったことは、震災詠が1番多いのは東日本大震災発生年の2011年であり、その後震災詠の数は減少傾向にあることである。また減少数は震災発生年に近いほど大きく、これは短歌の「機会詩」としての一面が強くでた結果だと考えられる。3点目に、震災語を含む震災詠は震災詠全体のうち約82%を占め、震災詠にはその災害を想起させるような言葉を直接詠み込むことが多いことが明らかになった。その数の推移は震災詠全体と似ていることもわかった。さらに扱われる震災語の種類は減少しにくいこと、震災詠の具体性は震災語の有無に依存しないことも推察できた。4点目にわかったことは、震災詠では心情・感情を詠うよりも、実際の出来事や風景を詠むことの方が好まれていることである。また感情を詠むか、現実を詠むか、という視点での震災詠全体としての内容は時間の経過で変化しにくいこともわかった。5点目に、「数字」が含まれる震災詠数は震災発生年の減少幅がとて大きく、それ以降は横ばい状態が続くことがわかった。さらに直接的に東日本大震災自体をあらわす「数字」はそのなまなましから、年月が経ってから詠まれやすいことも推察できた。

今後は新聞だけでなく雑誌なども、3月だけではなく他の月も、などといった収集する場・時期ともにより範囲を広げた調査が求められる。また本研究で理由を特定できなかった、「朝日新聞に震災詠の掲載が多い理由」「減少傾向にあるなかで震災詠が増えた年の増えた理由」についても引き続き調査する必要がある。

(指導教員 綿抜豊昭)